

夏目漱石

落第

落

第

— 「名士の中学時代」 —

現今の名士もかつては青年であつた。現今の青年も将来は名士たるべき運命を持っている。してみれば今の青年が、今の名士の青年時代を知るといふことは、実益もあり趣味もあり、誰だれでもそれが知りたいたのである。「中略」その事歴を名士自身の口から聞いて、これを筆記したので、他の新聞雑誌あるいは書物等を切抜きりぬいて綴つぎつたものとは、大おおいにその趣おもむきを異にし、これを精読する間には、名士の口吻こうふん動作等が、ありくくと目の前おもしろに見えるところが、いたって面白いのである。編者

そのころ東京には中学というものが一つしかなかった。学校の名もよくは覚えていないが、今の高等商業の横あたりにあつて、僕の入はいつたのは十二三のころかしら。なんでも今の中学生などよりはよほど小さかったような気がする。学校は正則と変則とに別れていて、正則のほうは一般の普通学をやり、変則のほうでは英語をおもにやった。そのころ変則のほうには今度京都の文科大学の学長になった狩野だの、岡田良平などもおつて、僕は正

則のほうにいたのだが、柳谷卯三郎、中川小十郎なども
いっしょだった。で大学予備門（今の高等学校）へ入る
には変則のほうだと英語をよけいやっていたから容易に
入れたけれど、正則のほうでは英語をやらなかったから
卒業して後さらに英語を勉強しなければ予備門へは入れ
なかつたのである。面白くおもしろもないし、二三年で僕はこの
中学を止めてしまつて、三島中洲先生のにしようがくしや二松学舎へ転じ
たのであるが、その時分ここにいて今知られている人は
京都大学の田島錦治、井上密などで、このあいだの戦争
にロシアへ捕虜になつて行つた内務省の小城などもおつ

たと思う。学舎のごときは実に不完全なもので、講堂な
どの汚きたなさときたら今の人にはとても想像できないほど
だった。真黒まっくろになった腸はらわたの出た畳たたみが敷すいてあつて机な
どはさらにない。そこへ順序もなく坐すわり込んで講義を聞
くのであつたが、輪講の時などはちょうどカルタでも取
るような工合くわいにしてやつたものである。輪講の順番を定き
めるには、竹筒たけづっぽの中へ細長い札はの入はいっているのを振ふ
つて、生徒はその中から一本宛ずつ抜いてそれに書いてある番
号で定めたものであるが、その番号は単に一二三とは書
いてなくて、一東、二冬、三江、四支、五微、六魚、七虞ぐ、

八齊^{せい}、九佳^{けい}、十灰^{かい}といったようにどこまでも漢学的であった。なかには、一、二、三の数字を抜いてたゞ東、冬、江と韻ばかり書いてあるのもあつて、虞^ぐを取れば七番、微を取れば五番ということがすぐに分^{わか}るのだから、それで定めるのもあつた。講義は朝の六時か七時ごろから始めるので、往昔^{むかし}の寺子屋^{てらこや}をそのまま、学校らしいところなどはちつともなかつたが、そのころはまた寄宿料等もきわめて廉^{やす}く——僕は家から通つていたけれど——たしか一カ月二円くらいだったと覚えている。

元来僕は漢学が好^{すき}でずいぶん興味を有^もつて漢籍はたく

さん読んだものである。今は英文学などをやっているが、そのころは英語ときたら大嫌いだいきらで手に取るのも厭いやなような気がした。兄が英語をやっていたから家では少しずつ教えられたけれど、教える兄は癩癩持かんしゃくもち、教わる僕は大好きときているからとうてい長く続くはずもなく、ナシヨナルの二くらいでお終しまいになってしまったが、考えてみると漢籍ばかり読んでこの文明開化の世の中に漢学者になつたところが仕方しかたなし、別にこれと云う目的があつたわけでもなかつたけれど、このまままで過つまごすのは充つらないと思うところから、とにかく大学へ入ってなにか勉

強しようと決心した。そのころ地方には各県に一つ宛く
 らい中学校があつて、これを卒業して来た者はほとんど
 無試験で大学予備門へ入れたものであるが、東京には一
 つしか中学はなし、それに変則のほうをやつた者は容易
 に入れたけれど、正則のほうをやつたものだとさらに英
 語をやらなければならぬので、予備門へ入るものは多
 くせいりつ成立学舎、共きやうりつ立学舎、進しんぶん文学舎、——これは坪内さ
 んなどがやっていたので本郷ほんごう壱岐き殿坂どのざかの上あたりにあつ
 た——その他これに類する二三の予備校で入学試験の準
 備をしたものである。そこで僕も大いにほっしん発心して大学予

備門へ入るために成立学舎——駿河台するがだいにあつたが、たしか今の曾我祐準そがのりすけの隣だつたと思う——へ入学して、ほとんど一年ばかり一生懸命いっしょうけんめいに英語を勉強した。ナシヨナルの二くらいしか読めないのが急に上の級クラスへ入はいつて、頭からスウィントンの万国史などを読んだので、初めのうちは少しも分わからなかつたが、その時は好すきな漢籍さえ一冊残らず売つてしまひ夢中になつて勉強したから、しまいににはだんぐ／＼分るようになって、その年（明治十七年）の夏は運よく大学予備門へ入ることができた。同じ中学におつても狩野、岡田などは変則のほうにいたから早く

予備門へ入って進んで行ったのだが、僕などが予備門へ入るとしては二松学舎や成立学舎などにまごついていただけ遅れたのである。

なんとかかかんとかして予備門へ入るには入ったが、惰なまけているのははなはだ好きで少しも勉強なんかしなかった。水野鍊太郎、今美術学校の校長をしている正木直彦、芳賀矢一なども同じ級だったが、これ等らは皆みな勉強家で、おのずから僕等の怠なまけ者ものの仲間とは違って、その間に懸隔けんかくがあったから、さらに近づいて交際するようなこともなくまるで離れておったので、むこうでも僕等のよ

うな怠け者の連中はだめな奴等やつらだと軽蔑けいべつしていたろうと
思うが、こつちでもまた試験の点ばかり取り取ったがつてい
るような連中はともに談ずるに足らずと観じて、僕等は
ただ遊んでいえらるのを豪いことのごとく思つて怠なまけていた
ものである。予備門は五年で、そのなかに予科が三年本
科が二年となつていた。予科では中学へ毛の生はえたよう
なことをするので、数学などもずいぶんたくさんあり、
生理学だの動物植物鉱物など皆みな英語の本でやったもの
である。だから読むほうの力は今の人達たちより進んでいた
ように思われるが、しかし生徒の気風に至つては実に乱

暴なもので、それから見ると今の生徒は非常に温順おとなしい。
 皆いたずらな悪戯ばかりしていたものでストーブ攻ぜめなどといっ
 て、教室の教師の傍そばにあるストーブへ薪まきをいっばいいくべ、
 ストーブが真赤まっかになるとともに漢学の先生などの真面目まじめ
 な顔が熱いのでやはりストーブのごとく真赤まっかになるのを
 見て、クスく笑って喜んでいた。数学の先生がボール
 ドに向むかって一生懸命説明していると、後から白墨チヨークをもつ
 てその背中へ怪しげな字や絵を描かいたり、また授業の始
 まる前にことごとく教室の窓を閉しめて真暗まつくらな処ところに静ま
 り返はいっていて、入はいって来る先生を驚かしたり、そんなこ

とばかり嬉^{うれ}しがっていた。予科のほうは三級、二級、一級となっていて、最初の三級は平均点の六十五点も貰^{もら}ってやつとこさ通るには通ったが、やはり怠^こけているからなにもできない。ちようど僕が二級の時に工部大学^{こうぶ}と外国語学校が予備門へ合併したので、学校は非常にゴタく^くしてずいぶん大騒ぎだった。それがだんく^く進歩して現今の高等学校になったのであるが、僕はその時腹膜炎をやったとうく^く二級の学年試験を受けることができなかった。追試験を願^{ねが}ったけれど、合併の混雑^{こんざつ}やなんかで忙^{いそ}しかったとみえ、教務係の人は少しも取合^{とりあ}って

くれないので、そこで僕は大きいと考えたのである。学課のほうはちつともできないし、教務係の人が追試験を受けさせてくれないのも、忙しいためもあるうが、第一自分に信用がないからだ。信用がなければ、世の中へ立つたところでなにごともないから、まず人の信用を得なければならぬ。信用を得るにはどうしても勉強する必要がある。と、こう考えたので、今までのようにうっかりしてはだめだから、いっそ初めからやり直したほうがいいと思って、友達ともだちなどが待っていて追試験を受けろとしきりに勧めるのも聞かず、自分から落第して再

び二級を繰返すことくりかえにしたのである。人間というものは考え直すと妙なもので、真面目になって勉強すれば、今まで少しも分わからなかつたものもはつきりと分るようになる。まえにはできなかつた数学なども非常にできるようになった、一日親睦会の席上で誰だれは何科へ行くだろう誰は何科へ行くだろうと投票をした時に、僕は理科へ行く者として投票されたくらいであつた。元来僕は訥弁とつべんで自分の思っていることが言えない性たちだから、英語などを訳しても分っていないながらそれを言うことができない。けれども考えてみると分っていることが言えないというわけ

はないのだから、なんでも思い切っつていうに限ると決心して、その後は拙ますくてもかまわずどし／＼言うようにすると、今までは教場などで言えなかつたこともずん／＼言うことができる。こんなふうに落第を機としていろいろな改革をして勉強したのであるが、僕の一身にとってこの落第は非常に薬ごまになったように思われる。もしその時落第せず、ただ誤魔化かしてばかり通つて来たら今ごろはどんな者になつていたかしのれないと思う。

前にいったようにみずから落第して二級を繰返くりかえし、そして一級へ移つたのであるが、一級になるともう専門に

よってやるものも違うので、僕は二部のフランス語を扱えらんだ。二部は工科で僕はまた建築科を扱んだがその主意がなかなか面白い。子供心こどもごころに異おつなことを考えたもので、その主意というのはまずこうである。自分は元來変人だから、このまゝでは世の中に容いれられない。世の中に立ってやってゆくにはどうしても根柢こんていからこれを改めなければならぬが、職業を扱んで日常欠くべからざる必要な仕事をすれば、しいて変人を改めずにやってゆくことができる。こっちが変人でもぜひやってもらわなければならぬ仕事さえしていれば、しぜんと人が頭を下げて

頼みに来るに違いない。そうすれば飯めしの喰くい外はぐれはないから安心だというのが、建築科を択すんだ一つの理由。それと元来僕は美術的なことが好すであるから、実用とともに建築を美術的にしてみようと思つたのが、もう一つの理由であつた。僕は落第したのだから水野、正木などの連中は一つさきへ進んで行つてしまつたのであるが、僕が残つた級には松本亦太郎などもおつて、それに文学士で死んだ米山という男がおつた。これは非常な秀才で哲学科にいたが、だいぶ懇意こんいにしていたので僕の建築科にいるのを見てしきりに忠告してくれた。僕はそのころピラ

ミッドでも建てるような心算つもりでいたのであるが、米山はなかなか盛んなことを言うて、君は建築をやるというが、今の日本の有様ありさまでは君の思っているような美術的の建築をして後代に遺すのこなどということはとても不可能な話だ、それよりも文学をやれ、文学ならば勉強次第で幾百年幾千年の後に伝えるべき大作もできるじゃないか。と米山はこう言うのである。僕の建築科を択んだのは自分一身の利害から打算したのであるが、米山の論は天下を標準としているのだ。こう言われてみるとなるほどそうだと思われるので、また決心を為直しなおして、僕は文学をや

ることに定め^きたのであるが、国文や漢文なら別に研究する必要もないような気がしたから、そこで英文学を専攻することにした。その後は変化もなく今日までやってきているが、やってみればあまり面白^{おもしろ}くもないので、このごろはまた、商売替^{しょうばいがえ}をしたいと思うけれど、今じやもう仕方^{しかた}がない。初めはずいぶん突飛なことを考えていたもので、英文学を研究して英文で大文学を書こうなどと考えていたんだが……。

(明治三九・六・二〇「中学文芸」)

日本文学電子図書館

落 第

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 1 卷」角川書店
昭和42年10月10日 8版発行

日本文学電子図書館